

2018年4月29日（日）「再臨に備える生活」

マタイ 16:24-28（その2）

24 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。25 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。26 人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましょう。そのいのちを買い戻すのには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。

27 人の子は父の栄光を帯びて、御使いたちとともに、やがて来ようとしているのです。その時には、おのおのその行いに応じて報いをします。28 まことに、あなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、人の子が御国とともに来るのを見るまでは、決して死を味わわない人々がいます。」

#### 【序論】

人は何のために生まれ、何のために死んでいくのか。多くの宗教・哲学がこの問いに答えようとしていますが、聖書の答えはその中でも独特と言えるかも知れません。目的の主体が自分ではなく神（キリスト）にあるからです。『ハイデルベルク信仰問答』第1問を参照してみましょう。

問1 生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。

答え わたしがわたし自身のもではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。

ここでは「目的」という言葉こそ使われていませんが、内容の本質はクリスチャン全般に対する人生の目的の問いかけです。そして、私たちのすべての目的はキリストに向かうと言われる。

しかし、人は基本的に自分の目的のために懸命に生き、幸せを求め、苦痛を避けようとするのではないのでしょうか。それは人間なら誰でも同じです。ところが、聖書は（とりわけ今日の箇所は）、世の幸福基準に対して待ったをかけているように思われるのです。地上の命と永遠の命が天秤にかけられ、あなたはどちらを選択するかと問われる。優等生なら「私は永遠の命を選択します」とサラッと答えるかも知れません。しかし、人間の本能は地上の苦しみを避けたがるのです。私はこの箇所と格闘しながら、主イエスの言葉の真意を掴み取ろうと努めました。

## 【本論】

先週に引き続き、16:24-28 を扱います。今回は 24 節の「十字架を負う」という内容を中心に学びましたが、今日はそれを前提としつつ、命の問題、再臨の問題を考えてまいります。

### 本論 1. 命の問題

**それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。(16:24)**

前回は扱った箇所ですが、繰り返し聞くべき御言葉です。この中で言われている「自分を捨てる」という表現が改めて気にかかります。主イエスの弟子は、彼に従って行く時に自分を捨てることが求められる。この要求はすべてのキリスト者に例外なく向けられています。しかしながら、自分を捨てることが如何に難しいかは、私たち自身が一番よく知っているのではないのでしょうか。人間の基本的な傾向は、自己を固く保ち、自分の興味あるところに集中し、できる限りの成功を収めようとし、ところが、主イエスは私たちに、この世のものへの興味関心を放棄し、代わりに十字架を負うことをお求めになるのです。十字架という重荷は、他の何かを握りしめてはとて負うことができないほど重たいものです。片手で何かを持ち、もう一方の手で十字架を持つことはできない。十字架にのみ集中しなくては、両方を落とすことになるでしょう。主イエスが山上の説教の中で言っておられた御言葉が思い起こされます。

**だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということとはできません。(6:24)**

ここでは「神か富か」という二者択一が迫られています。私たちの人生においては必ずしも「富」だけが神に取って替えられ得るものとは言いきれません。私たちの趣味、仕事、交友、計画……等々が、神よりも上に置かれてしまうことがある。「自分を捨てる」とは、私たちの全存在を挙げての自己投棄であり、十字架以外のものは自分の中で死んだと宣言し続けることなのです。このことをより具体的に考えていきましょう。

**いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。**

(16:25-26)

ここには「いのち」にまつわる解釈の難しい問題があります。「いのち」とは、この世の命のことなのか、それとも永遠の命のことなのか（原文では「*ψυχή*」→「命」「魂」）。恐らく、ここで言われていることは、もし私たちがこの世の命に属するものを得ることに集中しエネルギーを費やすなら、魂も永遠の命も包含する「完全な意味における命」を失うことになると言われているのでしょう。私たちが自分を中心とした関心事に腐心しておりますと、永遠の命そのものを見失ってしまう。もっと言えば、その人は存在している、神と離れているがゆえに（霊的に）生きていない状態になるのです。

私たちがこの人生において、神よりも何かを上置きそうになる状況は絶えず（死ぬまで）付きまといまいます。それは人生の各段階によって内容もレベルも異なりますが、常に共通項があります。私は子どもの頃、かなり早い時期にそれを知りました。私たち三人兄弟（兄、姉、私）は、親に言われるまま小学生のうちから礼拝に出席していました。しかし、同世代の友人たちは母子室にいて、大きな窓ガラス越しに「ヨンボ（私の幼少の頃のあだ名）、つまんねえ屋に行こう（当時あった駄菓子屋）」と書いた紙を高く掲げて見せてくるのです。それを見ると、私の心は揺れました。礼拝の重要性が分からない子どもにとって、何と大きな誘惑であったことか。一度は彼らの誘いに引っ張られ、トイレだと偽って礼拝を抜け出したこともありましたが、教会を背に走る自分の後ろ髪が痛く引っぱられるのを感じたものです。

大人になると、事情はもっと複雑になります。礼拝を守るか守らないかという状況だけではなく、正しいことを行なうか行なわないか、語るべきことを語るか黙するか、真実を認めるか認めないか、罪を告白するかしないか、霊的な判断を取るか肉体的な判断を取るか……といった様々な問題に直面するようになる。私たちはこれら一切の決断に当たって、自分がこれから行おうとしていること、語ろうとしていることは、神の御前に誠実だろうか、神への奉仕に結び付いているだろうか、ということを考えなくてはなりません。私たちにとっての価値とは、もはやこの世の繁栄ではなく、むしろキリストのためにそれを失うところにあるのです。そのためには自分の非を認めることや、真理のために嘲けられることも含まれてくるのでしょう。私たちのすべての時間は、主と隣人に仕えることのためにささげられる。

26 節で「まことのいのち」（*τὴν δὲ ψυχὴν αὐτοῦ*）と訳されている部分がありますが、直訳すると「彼自身の命」です。これは本質的に、魂も永遠の命も含む、（肉体に止まらない）完全な意味における命のことが言われています。「全世界を手に入れても」とは、世界中にあるすべての夢・宝を手に入れたとしても、ということでしょう。審きの日に、人は失った魂を買い戻そうと、この世で得た何がしかの宝を神に差し出そうとするかも知れません。しかし、それは無駄なことです。失った魂は二度と返ってはこない

からです。主イエスは魂の重要性、永遠の命の重要性を厳粛に語っておられます。私たちがこの地上で何に対して魂を注ぐか。地上のものか、キリストに属するものかという二者択一の問いかけがなされているのです。

## 本論 2. 再臨の問題

人の子は父の栄光を帯びて、御使いたちとともに、やがて来ようとしているのです。その時には、おのおのその行いに応じて報いをします。(16:27)

急に再臨の話に跳んだ感じがしますが、これまでの内容との密接な繋がりがあります。人がこの世で何のために生きたかということが、世の終わりの日に問われる。主の弟子として生きたか、そうでないか。弟子としてふさわしい歩みをしたか否か。私たちが魂を注いだものは何であったか。永遠の命か、地上の命か。ここで言われている「行い」とは、救いのための善行とか個々の行動ではなく、主イエスの弟子として生きたかどうかという人生全体の相対的な評価です。私たちは目を覚ましていなければなりません。魂が眠りこけている時に、主の日は盗人のようにやって来るからです(マタイ 24:36-50)。

まことに、あなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、人の子が御国とともに来るのを見るまでは、決して死を味わわない人々がいます。」(16:28)

解釈の難しい部分が残りました。主イエスは十二弟子を前に話しておられるのですが、普通に読みますと、その中の幾人かは再臨の時まで生きていられると言われてるように思えます。しかし、私たちが知っているように、主の再臨は 2000 年以上経った今もまだ訪れてはおらず、十二弟子はすべてこの世を去りました。では、ここで主が言われていることはどういう意味なのでしょう。

プランマーという注解者は、ここで言われている「主の来臨」について7つの解釈の可能性があると述べています<sup>1</sup>。

### 《奥村解説》

- ①山上の変貌・・・主イエスが父の栄光を帯びて戻って来られることを立証
- ②復活と昇天・・・復活の主が再び来られる出来事と見る
- ③ペンテコステ・・・聖霊降臨を主が再び来られる出来事と見る
- ④キリスト教の拡大・・・福音の世界的拡大を「来臨」による御業と捉える
- ⑤福音の内部的発展・・・教会内での福音の前進を「来臨」による御業と捉える
- ⑥エルサレム陥落・・・紀元70年のユダヤ戦争による崩壊を「審き」と捉える
- ⑦再臨・・・世の終わりの本当の再臨

---

<sup>1</sup> L. Morris, p. 434

この中でどの解釈が妥当かと考えていきます時に、答えは複数のものが重なり合っていると言うことができるでしょう。恐らく、主の言わんとしていることは、ご自分が復活なさることを一つの「来臨」として捉え（②）、その後、使徒の働きの中で述べられている様々な出来事（③④⑤）を弟子たちが見ていくということなのでしょう。教会を通して主イエスが王として統治を始めていく様子を弟子たちは目撃するのです。

**私たちは、あなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨とを知らせましたが、それは、うまく考え出した作り話に従ったものではありません。この私たちは、キリストの威光の目撃者なのです。（Ⅱペテロ 1:16）**

更に拡大解釈するならば、主イエスの来臨の方法は多岐に亘っていると言うことができる。現在の私たち聖書読者にとって主の来臨とは、世の終わりのことだけを考えればよいものではないのです。私たちの人生の終わりもその時と言えるかも知れません。毎週の礼拝（主の日）もまた、来臨の時と言ってよいでしょう。また、日々の生活の中で、主が私たちに御言葉を通して語られる時、主は聖霊によって私たちに臨んでおられる。私たちは常に目を醒まし、主とお会いする備えをして生きていなくてはなりません。一日の終わりに主は私たちに会おうとしておられるかも知れない。「一日の終わりも生涯の終わりのように」（歌「ゆるし」より）。この積み重ねが、私たちが主の御前に立たせる備えをなさせるのです。

## 【結論】

今日の前半の話との関連性が見えてこないでしょうか。私たちがオールタイムで主に仕えていること、他の何物にも見向きもせず、主の十字架だけを見つめて生きることがなぜ求められるかが分かってくるはずです。それは、再臨に備える生き方にほかなりません。多くの魅力的なものがこの世にはあります。しかし、私たちの魂の問題を取り扱うことができるのは主の十字架だけです。そして、主の十字架を担って生きていくなれば、その他のすべてが自分の願いを超えて与えられていくことも約束されています。

## 【祈り】

神の国の統治者であられる主よ。あなたは今まさに教会を通して世界を治めておられます。光は闇を照らし、神の真理を覆い隠すことのできるものではありません。私たちは今、主のご臨在の下に生きているということを覚えます。いつでも主とお出合いすることができ、いつでも再臨の香りを感じることができます。どうぞ私たちの人生を主の十字架へと向かわせてください。いつ如何なる時にも、主を第一として生き、真の再臨の日に喜んで主をお迎えすることのできる者であらせてください。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

世の終わりの時を定め、ふさわしい時に御子を世に遣わし給う、父なる神の愛。

教会を通して世界に福音を宣べ伝え、平和の支配を拡大し給う、主イエス・キリストの恵み。

最大の再臨を迎えるに先立ち、日々の生活の中で十字架を担わせ、如何なる時にも主との交わりの内におらせ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。